

UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

20周年を迎えた事業のこれからを考える

会報

2023.
Mar.
No. 54



特集 1

京都高大連携研究協議会発足 20 年を迎えて

寄稿：独立行政法人教職員支援機構 理事長 荒瀬 克己 氏

寄稿：学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授 溝上 慎一 氏

Talk：高大連携・接続の“これまで”と“これから”

特集 2

京都の大学生が作り、つなげた 20 年

Interview：第 20 回京都学生祭典実行委員会



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

京都高大連携研究協議会発足 20 年を迎えて

京都高大連携研究協議会は、京都府内の高校と大学の円滑な連携から、双方の教育の活性化に資することを目的とし、京都ならではの『面と面の連携』による人材育成を目指して、2003 年に発足し、2022 年に 20 年の節目を迎えました。そこで、20 周年を記念して、様々な視点から、これまでの高大連携・接続の歩みを振り返り、これからの高大連携・接続を見つめます。

京都高大連携研究協議会 会長
公益財団法人大学コンソーシアム京都 理事長

黒坂 光



京都高大連携研究協議会は、今年で発足 20 年を迎えました。

本協議会は、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都という京都ならではの産官学の組織が、学校間競争や個別の利害関係を乗り越えて連携し、それにより次世代の人材を育成しようという大きな目的を持ち、2003 年 5 月に、全国に先駆け発足しました。

今年で 20 回目となる高大連携教育フォーラムを主軸とし、現在、高大連携事業として推進する「高大社連携キャリア教育プログラム」「高校・大学教職員交流企画」など、これまでに様々な高大連携の取組を展開してまいりました。

本協議会が長きにわたり、多様な取組を展開することができましたのも、ひとえに本協議会の構成団体である京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所をはじめ、大学コンソーシアム京都の加盟大学・短期大学、京都府内の高等学校、関係者の皆様のご理解とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

グローバル化、情報化、少子高齢化など、急激に変化する時代の中で、「大学のまち京都・学生のまち京都」で学ぶ生徒・学生が資質・能力を育み、将来の社会を担う「持続可能な社会の創り手」となることを目指し、今以上に調査、研究、実践を行い、高等学校と大学の連携・接続を基盤とした京都地域全体の教育の質を高めるため、次のステージに向けてより一層の精進を重ねて参る所存です。今後とも倍旧のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

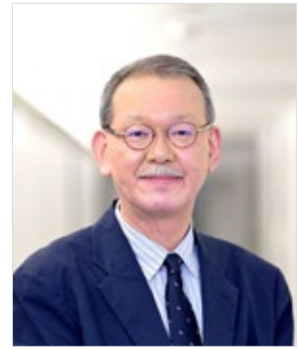
京都高大連携研究協議会取組事業

		第1ステージ		第2ステージ					
		2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
交流 研修	高大連携教育フォーラム								
	教職員交流企画（京都高校教員交流会）*								
学習 支援	実践研究共同教育プログラム								
	京都の大学「学び」フォーラム								
進路 指導 支援	Kyoto カタリ場								
	まるっとく								
	ガールズ・キャリア・トーク ワーク・ライフトーク								
	高大連携フューチャーセッション 高大社連携フューチャーセッション								

*2022 年 12 月より、「京都高校・大学教職員交流会」に名称変更

独立行政法人教職員支援機構 理事長

荒瀬 克己 氏



撮影：荒川潤

多様な視座を生かし「生徒が主語になる」高大連携を

中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」（2021年1月）は「個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を重視する。もとよりこれは、いままでの「個に応じた指導」を否定するものではない。むしろ、子供一人一人が自立した学習者として、ICTも活用しながら、自ら学習を調整しながら学ぶことができるようになるには、「個に応じた指導」の充実がこれからも必要であるとする。

「個に応じた指導」には二つの側面がある。一つは、教師が支援の必要な子供に重点的な指導を行うことや、一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」である。

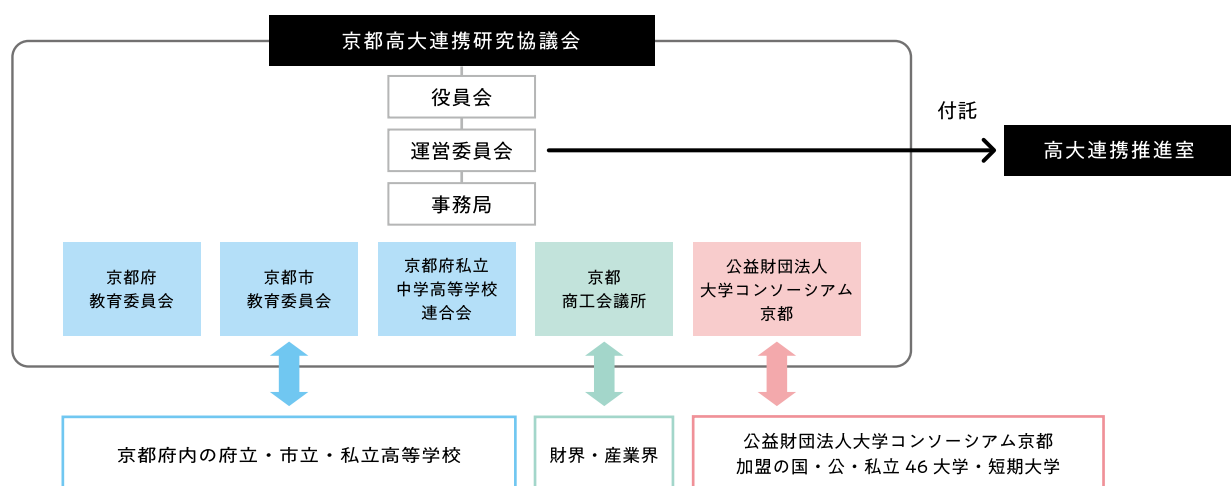
もう一つは、教師が一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供が興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、たとえば探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行うことができるようになるなど、子供自身が、学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」である。

これら「指導の個別化」と「学習の個性化」を指導者視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。つまりこれは、視座を転換しているということだ。

「令和の日本型学校教育」の答申は「はじめに」で、「一人一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿」を描くと述べる。この表現は、新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ「審議まとめ」（2020年11月）の「生徒を主語にした高等学校教育」を受けてのものだ。生徒を主語にすることもまた、視座の転換である。視座を変えると、たとえば、教師は丁寧に教えているが、生徒は実際に何を学んでいるかという問いに出合いもする。生徒を主語にすることは、高校教育を見直すことに繋がる。

京都高大連携研究協議会は、京都府、京都市両教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都によって構成されている。立場や役割の異なる組織が集まることの重要な意味は、多様な視点や発想が交じり合うということであろう。生徒の学びと成長に視点を置き、多様な視座を生かして、生徒が主語になる高大連携を模索し実践する。それこそ京都高大連携研究協議会の真骨頂ではないかと思う。

京都高大連携研究協議会体制図



寄稿

学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授

溝上 慎一 氏



できるようになった高大連携の一層の充実を京都から

去る2022年12月3日（土）に、「キャンパスプラザ京都」で第20回高大連携教育フォーラムが実施され、私も記念講演2で話をさせていただいた。100回近くと言えば大げさだが、それくらい足を運んできたこの会場で話をし、また京都で長年交流してきた多くの教育関係者と旧交を温め、「ここは私にとってのホームだ」と思ったのは正直なところだ。京都から横浜に移って4年、コロナ禍の間自宅のある京都にも戻ってくることができず、そうした中での感慨深さもあったように思う。

高大連携は今でこそ当たり前になり、イベントの同じ会場に高校・大学の教職員が机を並べて座っていることは何も珍しい光景ではなくなっている。しかし、私はかつてその光景を作り出そうとあれこれ奮闘したが、それでもなかなか実現しなかった。もどかしく、忘れられない記憶の一つである。「大学生の学びと成長」をスローガンとして大学教育改革に携わり始めて15年経った2010年頃、データやエビデンスをもとに大学生の学びと成長を見ていこうとしていた。データが示唆したのは、高校生までの間に取り組んでこなかったこと、できなかったことに大学生になってゼロベースで取り組んでも、できるようにはならないということであった。人の誕生以来の発達を少し考えれば当たり前のことであるが、当時はかなりショッキングな知見であった。この知見を、大学受験至上主義に陥っている高校関係者と共有して、生徒・学生の学びと成長を共に実践する共同体でありたい。そう願って、高大を繋ぐフォーラムやイベントをいろいろ企画し、実施したのである。しかし、先に述べたように、高校・大学の教職員が共に同じ会場で議論することはなかなか実現しなかった。それが目に見える形で実現するようになったのは、政府が高大接続改革を始めた2015年以降のことである。ここから先はご存じの通りである。

京都高大連携研究協議会が発足して20年。私が話しているのは10年前くらいのこと。同協議会がいかに早い時期からこのテーマに取り組んできたかがわかる。ホームの京都で、先進的な高大連携事業が取り組まれ、全国に大きな影響を及ぼしていることを心から嬉しく思っている。ますますの発展を祈念し、そして京都を離れた私でも、まだ関わることがあるなら、その発展の一助となるべく貢献したいと思う次第である。

「第20回高大連携教育フォーラム」開催レポート

2022年12月3日（土）、「第20回高大連携教育フォーラム」を開催しました（本フォーラム初となる対面とオンラインのハイブリット形式での開催）。テーマは「2020年代を通じて実現すべき高大連携—生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために—」。

第1部の記念講演では、独立行政法人教職員支援機構 理事長の荒瀬克己氏から、「令和の日本型学校教育」答申を基に「自分で考えて、判断して、行動できる力」の重要性とどのような指導が求められているかについてお話いただきました。

次に学校法人桐蔭学園 理事長、桐蔭横浜大学 教授の溝上慎一氏からは、高校生を10年追跡調査した結果を基に、生徒や学生の発達（時間的、空間的な拡張）においては「探究」がひとつのキーワードになることや、教育のデジタル化がさらに加速することへの課題が述べられました。

その後のパネルディスカッションでは、京都府教育委員会、京都市教育委員会、立命館宇治中学校・高等学校から京都地域の事例報告とコメンテーターを交えた意見交換が行われました。

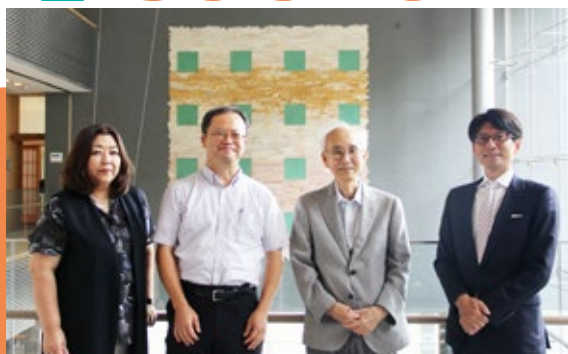
第2部の分科会では、報告者やコーディネーターを中心に質疑応答やグループワークが行われ、「これからの高大連携教育に必要な『社会の創り手』をどのように育てていくか」を報告者と参加者が共に考える機会となりました。



Talk

高大連携・接続の“これまで”と“これから”

京都高大連携研究協議会のこれまでの高大連携事業を支えてきた現・元高大連携推進室の4人の先生方に、歩みを振り返るとともに、これからの方向性についてお話しいただきました。



写真左から、山本先生、長谷川先生、中村先生、乾先生。

長谷川 豊 氏 (高大連携推進室長/京都府立大学 公共政策学部 准教授)

※ 2016 年度～ (2020 年度～室長)

山本 以和子氏 (高大連携推進室員/京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授)

※ 2010 年度～ (2019 年度室長)

乾 明 紀 氏 (高大連携推進室員/京都橘大学 経済学部 准教授)

※ 2021 年度～ (2003 ～ 2007 年度佛教大学職員として大学コンソーシアム京都出向)

中村 博幸 氏 (元 高大連携推進室員/元 京都文教大学 臨床心理学部 教授)

※ 2003 ～ 2019 年度

「京都の大学『学び』フォーラム」から京都一丸の 高大連携へ

長谷川：大学コンソーシアム京都が設立された当時は、まだ京都高大連携研究協議会や高大連携推進室といった組織はなかったのですね。

乾：2002年度から開始された「京都の大学『学び』フォーラム」が、大学の模擬授業や体験型講座を提供しながら、高校生に京都へ進学してもらうための広報的な部分も含んだ高大連携でした。

山本：90年代頃から、高校生が京都の様々な大学を見て回るという取組が始まったようです。当時、都市部にあった大学が郊外へ移転してキャンパスを構えることが増えてきたので、京都府、京都市、産業界も参画したコンソーシアムという形で学生を取り込もうという動きがありましたね。

長谷川：教育や研究以前に、京都の大学の入学者が減っていくことに対する強い危機感があったと。そこで、個々にはなく大学全体で京都の大学の良さを知ってもらって、学生として来てもらうため、高校生に向けた取組を始めたわけですね。

中村：当初は東京や大阪で、同じ日に京都全体が一丸となって、各大学が様々な分野を分担して模擬授業を行っていました。面白い大学と出会い、オープンキャンパスに行ってその大学を深く知ってみようと思ってもらえたら。そんな学びのきっかけづくりを目的にしていましたね。

乾：当初の「京都の大学『学び』フォーラム」は、各大学の特色ある授業を提供するイベントでした。このイベントの企画運営に高校の先生が関わることはありませんでしたが、2003年に協議会をつくることで、高校の先生と「一緒に」企画運営をしていく関係ができてきました。そして、一緒に企画を検討していく中で、学生の確保や偏差値ではなく、「接続教育」や「学力問題」を共通言語に、生徒・学生をどのように育てていくのか考えるようになったと思います。

入試としての接続ではなく、高校と大学で学びを つなげる

乾：2000年前後、『分数ができない大学生』が話題になりましたが、大学のFDでの議論の中でも、学力問題や接続問題が論点になってきました。そして、2003年の第9回FDフォーラムは、「生徒が学生に成長するために」という高大接続がテーマとなり、第1回高大連携教育フォーラムと合同開催することになりました。

中村：そこから高大連携やリメディアル教育へとつながっていった。大学コンソーシアム京都はFDもそうですが、リメディアル教育でもパイロットモデルとして行っていましたね。

乾：そう、リメディアル！中村先生は「学生は“生徒”から“学生”に身分は変わってもひとりの人間だから、丁寧に見なければいけない」と話され、初年次教育や接続教育の重要性を訴えておられましたね。プログラムをどのようにして連携して授業をするか、「大学は高校のことを知らないし、知ろうとしていないところが問題ではないか」と中村先生と議論しましたね。当時は高校が大学に距離も警戒もあり、高大ともに、どのように先生とつながればよいかわからないという感じはありましたね。

中村：やはりお互いの窓口がないので、大学コンソーシアム京都に窓口機能を持たそうということになったのです。高校生に大学での授業を体験してもらったり、大学の演習授業を出前するために大学教員を派遣したり、私たち自身もあちらこちらの高校に出前しましたね。それが、高大連携教育フォーラムの分科会にもつながっていくのです。

長谷川：リメディアル教育や初年次教育といった高校との接続・連携を強く意識しながら、入試ではなく、高校で身につけた学力を大学教育にどうつなげるのかということですね。

中村：当時、「出前授業などの件で大学に相談に行くと、入試課にまわされる」と嘆いておられる高校の先生もありました。

乾：その議論もありましたね。入試としての接続ではなく、

学びでつながりたいという意識へと変えていきたいという思いはありました。

山本：「学びをつなげる」。入試だけで持ちきれない接続機能を合格後、入学後の教育プログラムでつないでいけるようになるというですね。

面と面のつながりを意識した高大社連携キャリア教育を目指して

長谷川：2015年度で「京都の大学『学び』フォーラム」が廃止される一方、京都府北部地域生徒向けの「まるっとく」や、女子生徒に焦点を当てた「ガールズ・キャリア・トーク」など、キャリア教育プログラムが高度化していきましたよね。ジェンダーの視点に立ったキャリア教育の必要性から実施したのでしょうか。

山本：当時、講義等で若者に伝えるキャリアモデルは数十年前の男性型が主流でした。そこで、これからの女性目線で立案した企画が「ガールズ・キャリア・トーク」です。女性の社会人が持つ背景や事情の中で、ライフとキャリアの葛藤をどのように克服や調整をしていたのか、のリアルな事例を取り上げました。それが「ワーク・ライフトーク」としてジェンダーレスに発展し、今の「高大社連携フューチャーセッション」となりました。

長谷川：フューチャーセッションは、高校生・大学生にとどまらず「社会人」にもゲストとして加わっていただいたり、高校生と大学生に実行委員として企画から参画してもらったり、「面と面の連携」を意識した新たな試みになりましたね。

乾：面と面の捉え方にもよりますが、フューチャーセッションの実行委員会による高大連携は、イベント当日だけの「点」ではないですね。実行委員の高校生と大学生は、SlackやZoomなどを使い約半年間つながっています。準備をするにあたって「リアル」より難しい側面もありますが、こういったデジタル技術を活用した連携は可能性があると思います。

山本：プログラムの目的に応じてリモート、対面等のツールを考えていけるといいですね。短期集中でインパクトのある方法と継続できるプログラムなどがあると裾野が広がって面白いと思います。京都府北部地域の生徒たちも参加できる形にしたいですね。

京都ならではの高大連携・高大接続の“夢”を語る

中村：最近では大学の偏差値で選んだり、東京の大学を選ぶより地元志向になってきています。その中で、京都での高大連携としてどうしていくかがこれからの課題になると思います。

長谷川：京都はこの土地ならではのブランドがあり、ポテンシャルがありますね。京都ブランドをどう打ち出して、これからの大学戦略につなげていくかだと思います。

乾：“リモート”がこれだけ進んでいる一方で、リアルな京都やキャンパスだからこその魅力をどう発信していくかということをもう一度考えていかないといけないですね。

山本：高校の形態も学び方も多様化され、従来の日本型高大

接続の枠にはまらなくなっています。京都は今までも多様性を受け入れてきた“まち”であり、その歴史と文化があるという特徴を生かして、面白いことができるのではと思います。

中村：京都の大学の形態も学びも、随分多様になりました。

山本：なので、コンソーシアムの屋根を借りて連携できるといいですね。

長谷川：この20年を振り返っても、個々の大学では難しい部分を、協議会が先取りして取り組んできたのではないのでしょうか。今までにない取組を企画して、それが主流になったら委ねる。次の方法や可能性を示すことで、京都での高大連携のあり方をリードするという大きな役割を担ってきたと思います。

乾：私が事務局として中村先生らと関わっていたときも、そこに面白さや求心力があったと思います。理想を語りパイロット的な取組をいろいろと提案しました。そして、その新しい考えを応援してくれるところに魅力がありました。問題が高度化し、負担感も高くなっているかもしれませんが、面白いことができる組織という魅力を求心力にできるといいですね。

中村：昔とは違い、インクルーシブの時代だからこそ、富士山型のモデルではなく、八ヶ岳みたいにあちらこちらに峰があり、それをインターネットやITでつなぐことができる時代ではないのでしょうか。多様化とはどれか一つではないので、京都の求心力や共通項から何か提案できないのでしょうか。

山本：八ヶ岳のイメージは、面白いですね。まずはこの峰、次はこの峰というように、山頂を作っていくのもよいと思いました。求心力を作るために応援しながらモデルを作ったり、議論をして夢を作ったり、ということに期待します。

乾：大きな一つの山のようなモデルを無理やり作ろうとするのではなく、個性的で多様な高大連携や高大接続があって、その多様性が面として面白い京都であってほしいですね。

山本：本来の高大接続のモデルを“夢”として挙げてみると、そこから少しずつ何ができるか、時代の歩調の半歩先を行くのはどれなのかと、時代を牽引できるような形にもっていくことができるかもしれませんね。

長谷川：京都の高校・大学の全組織が関わっていることがこの協議会の強みです。個々の事業をルーティーンとして行うのではなく、組織として次の展開に向けたアイデアを出し合う場を積極的に設けることが必要ですね。



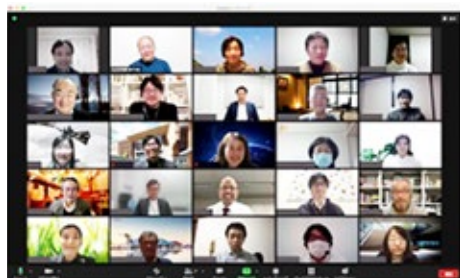
Report

大学コンソーシアム京都における 2022 年度事業実施報告

FD 関連事業

大学教職員の FD に対する意識を高め、大学教育の改善に資することを目的として、1995 年から毎年 FD フォーラムを開催しています。「第 26 回 FD フォーラム」では、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、シンポジウム、分科会、ポスターセッションから情報交換会に至るすべてにおいて、初めてオンラインで開催しました。2023 年 2 月開催の「第 28 回 FD フォーラム」についても、一部の分科会でハイブリッド開催するもののほとんどはオンラインで開催しました。

また、少人数制の研修プログラムである「FD 合同研修プログラム・テーマ別研修」では、FD の基礎知識、ICT、シラバス、授業設計、著作権、障がい学生支援などの知識やスキルの獲得を目的として全 6 回開催し、所属大学の枠を超えて大学教職員が交流する場で



FD 情報交換会の様子

ある「京都 FD 交流会」では、「ポストコロナにおける大学教育の場」を統一テーマに、入試、教育 DX、アクティブ・ラーニングについて、全 3 回開催しました。2022 年度は、オンライン開催を軸としつつも、一部を対面で開催し、参加者のニーズを図る機会としました。

株式会社リアセックと共催している「IR フォーラム」については、IR データを活用する組織的な教学マネジメントについて講演する内容となっているため、加盟校・非加盟校ともに参加者が増加し、2022 年度も募集定員を 1,000 名に設定しつつも、申込締切日までに定員に到達するなど、関心の高さがうかがえました。

SD 関連事業

SD 分野で関心の高まっているテーマを取り上げ、大学職員の能力向上や、大学の枠を超えた情報交流の場を提供することを目的として実施している「SD フォーラム」は、2020 年度からオンラインで開催しています。今年度は基調講演と 3 つの分科会と情報交換会を設け、実施しました。参加者数は昨年度より増え、大学が抱える時宜に見合った内容が、参加者の満足度を高める結果となりました。

「SD 共同研修プログラム」は、大学職員に対して、広い知見と高度な専門知識に加えて、大学を超えた情報交換やネットワークづくりの機会を得る場として、2019 年度までは対面で開催していましたが、コロナ禍により、2020 年度はすべてオンライン開催とし、2021・2022 年度は全 8 プログラムのうち一部のプログラムは対面開催としました。オンライン開催したものでは、加盟校だけでなく非加盟校の方にも多くご参加いただきました。

また、コロナ禍で 2020・2021 年度の 2 年間中止していた「SD ゼミナール」を、オンライン・対面を組み合わせ実施しました。



SD 共同研修プログラムの様子

高大連携事業

高大連携事業は、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都による「京都高大連携研究協議会」の事業として推進し、2022 年度は協議会発足 20 年となりました。

「高大連携教育フォーラム」では、「持続可能な社会の創り手」を育むためのこれからの高大連携・接続について高校・大学がともに考える機会として開催しました。2022 年度は、初のハイブリッド開催とし、全国から会場、オンライン共に多数の高校・大学教職員に参加いただきました。

「高大社連携フューチャーセッション」は、前年度に引き続き、京都府内の高校生・大学生による実行委員が企画・運営を担い、今年度は、3 年ぶりに対面のみでの開催となりました。改めて対面交流の重要性や喜びを感じるとともに、高校生・大学生の学びや気づきにつながる企画となりました。

「京都高校教員交流会」は、2022 年 12 月開催以降、高校・大学双方の課題に対する工夫や悩みを共有し、相互理解を深め、立場を超え解決に向けて交流できる場として、「京都高校・大学教職員交流会」に名称を変更し、開催しています。



高大社連携フューチャーセッションの様子

京都学生祭典事業

京都学生祭典は、学生の力で京都を盛り上げようと学生実行委員会が主体となって、2003年から毎年10月に平安神宮前・岡崎公園一帯（京都市左京区）において、おどりと音楽などが繰り広げられる一大イベントです。記念すべき20回目となった2022年度は、3年ぶりに全面的な対面開催で行い、一部企画については昨年の経験を活かしYouTubeでLive配信を行いました。

本祭当日は残念ながら午後から雨となり、プログラムを短縮することになってしまいましたが、京都学生祭典の伝統ある「京炎そでふれ!」の演舞や「Kyoto Student Music Award」の演奏など、学生の様々なパフォーマンスを多くのお客様の前で披露することができました。



第20回京都学生祭典の様子

京都国際学生映画祭事業

京都国際学生映画祭は、学生実行委員が運営する日本最大級の国際学生映画祭です。国内外を問わず、広く学生監督の作品を募集・選考を行い、京都国際学生映画祭で上映することで、京都から若き才能の発掘と国際交流を目的としています。

本祭に先立ち、映画祭の告知を兼ねたプレイベントとして、東京の高円寺シアターバックス、京都国際映画祭、京都国際マンガミュージアムやUPLINK京都にて昨年度第24回入選作品の上映・トークショーを開催しました。

2023年2月に第25回目となる京都国際学生映画祭を、京都文化博物館フィルムシアターでの開催とオンラインでの配信の2形式にて行いました。



第25回京都国際学生映画祭の様子

障がい学生支援事業

障がい学生支援事業では、障がい学生支援を担当する教職員を対象とする意見交換・研修の場の創出や、聴覚障がい学生に対する支援（情報保証のスキル向上等）を目的として、「関西障がい学生支援担当者懇談会」（KSSK）をはじめ、「ノートテイク・パソコンテイク養成講座」、「テーマ別研修会」、「高大連携懇談会」に取り組んでいます。

2022年度は、懇談会は対面で、講座・研修会はオンラインで行いました。「ノートテイク・パソコンテイク養成講座」では、実際に支援を受ける学生、支援をする学生に実体験を通して感じたことなどをお話いただき、各校における養成講座の開き方について検討する機会を作ることを目的としました。



障がい学生支援（テイク講座）

インターンシップ事業

2022年度は前年度に引き続き、Zoom を中心とするオンラインシステムを積極的に活用し実施しました。

企業や行政機関・非営利組織で約10日間の実習を行う「ビジネスコース・パブリックコース」では、事前・事後学習を Zoom で行いました。受講生はコーディネーターとなる教員のもと、実習先の業種ごとにクラスに分かれて指導を受けて実習に参加し、192名（ビジネスコース129名、パブリックコース63名）が修了しました。また、5か月間に渡って企業等が提示するプロジェクトを実行する「長期プロジェクトコース」では、対面で実施することを基本としながら、受入先についてはオンラインでも参加できる体制を整え実施しました。11月の最終講義では、活動成果報告会として活気あるプレゼンテーションが行われ、受講生22名が修了しました。

事業実施にあたって、受入先には感染症予防対策ならびにオンラインによる実習の実施、日程変更等の臨機応変な対応にご協力いただくとともに、受講生に対しては実習開始前の期間を含めて感染またはその疑いがある場合の事務局への連絡を徹底するなど、感染拡大を防ぎ安定した事業運営に努めた結果、大きな混乱を招くことなく実施することができました。

今後も学生が社会で生きていく上で必要な能力を身につけていく場として、引き続き本事業を推進していきます。



長期プロジェクトコース
授業の様子



ビジネス・パブリックコース
実習経験交流会



長期プロジェクトコース
プロジェクト・プレゼンテーション

単位互換事業

2022年度は加盟校から348科目の提供があり、延べ778名が単位互換制度を利用して科目を受講しました。

延べ出願者数における開講場所別の出願割合では、キャンパスプラザ京都で開講される科目が23.3%（223名）、オンラインで開講される科目が18.4%（176名）であり、受講場所を選ばないオンライン科目やキャンパスプラザ京都で開講される科目が合計で4割を超えました。

2022年度前期の単位互換生を対象としたアンケートでは、受講生の満足度は85.7%と非常に高く、また、知人や友人に推奨したいと考える割合も87.7%と非常に高い結果となりました。

財団では、オンライン形式やキャンパスプラザ京都で開講・提供される科目を推奨し、所定の基準を満たした科目には補助金を支給し支援しています。また、2023年度から、英語で授業を実施する科目が加盟校から広く提供されることを企図し、支援制度を整備しました。加盟校で開講されている特色ある科目が広く提供されることで、学生の興味・関心のある分野の学びがより一層広がる・深化することを期待しています。



京都ミュージアム PBL 科目成果発表会



京都世界遺産 PBL 科目での打合せの様子



京都ミュージアム PBL 科目成果発表会での発表の様子

京都学生広報部

京都学生広報部は、全国の中高生に京都で学ぶことの魅力を広く発信することを目的に、京都市と（公財）大学コンソーシアム京都により2015年度に設立された学生団体です。加盟校の学生で構成する広報部員が記者となって、リアルな京都取材し、ウェブサイト「コトカレ」を通じて発信しています。

2022年度は、高校生が京都学生広報部の部員とともに大学訪問や取材、記事執筆を体験することができる新たな企画「コトカレ高校生プロジェクト」を立ち上げました。参加した高校生からは、「大学に対する理解が深められた」「インタビューで得た知識を『記事』という形でまとめる作業が楽しかった」などの感想をいただき、高校生にリアルな京都の大学生活を体験してもらう良い機会となりました。



コトカレ高校生プロジェクト参加者との集合写真



コトカレ高校生プロジェクト取材の様子

地域連携事業

京都市と（公財）大学コンソーシアム京都では、大学・学生と地域が『コラボ』して京都のまちづくりや地域の活性化に取り組む企画・事業に支援金を交付し、取組を支援する「大学地域連携創造・支援事業（愛称：学まちコラボ事業）」を実施しています。

2022年度は、18事業の申請があり、13事業への支援を行いました。右京区京北地域の盆踊りの魅力発信や盆踊りの保存活動の促進を目的とした「京北盆踊り保存学生プロジェクト」や、児童生徒に向けたものづくり教室を通して、大学での学びの還元と学びを実践する場の提供を行い、京都の大学生発の教育的まちづくりを目指す「科学・ものづくり教育普及プロジェクト“ぽっけ”」など、本支援により、多くの事業が実施されています。



京北盆踊り保存学生プロジェクト



科学・ものづくり教育普及プロジェクト“ぽっけ”

都市政策事業（京都から発信する政策研究交流大会）

都市が抱える幅広い問題・課題を見つけ、解決するための研究を行う学生に発表機会を提供するとともに、教員を含めた研究交流の機会とすることを目的に、2005年度から毎年「京都から発信する政策研究交流大会」を開催しています。

2020年度、2021年度は、コロナ禍の影響により、オンライン開催となりましたが、2022年度の第18回大会は、国立京都国際会館にて、3年ぶりに対面にて開催いたしました。過去最高の応募者数となった今大会では、発表者資格審査を突破した63組の団体が、9つの分科会に分かれて、研究成果について、熱い発表を行いました。

表彰式では、ベスト質問賞、分科会ごとの優秀賞が発表され、その後の日本公共政策学会賞と大学コンソーシアム京都理事長賞は、同志社大学政策学部野田ゼミC班による発表「世代別・世代混成会議による民意創出 - 若い世代の市民参加促進に向けて -」がダブル受賞するというサプライズもありました。本大会で発表された研究内容については広く発信するとともに、研究内容が実際の政策に反映されるよう、取り組んでいきます。



発表の様子



表彰式の様子

単位互換海外留学派遣プログラム（国際連携事業：学生の海外留学・交流促進事業）

オーストラリア・ビクトリア州の大学連携体との協定を活用し、京都ならではの単位互換科目として、メルボルンにある大学附属語学学校への短期留学プログラムを実施しています。大学の枠を超えて、京都地域の大学生の誰もが参加可能な、4週間の英語による留学プログラムです。

本プログラムは、ホームステイをしながら質の高い英語学習を受け、現地で様々な生活体験ができるのが特徴です。しかし、近年はコロナ禍のため、オンライン留学に切り替えざるを得ませんでした。2020年度は実施できなかったものの、2021年度は説明会やオリエンテーションの段階から、現地語学学校関係者と楽しくコミュニケーションできるよう工夫することにより、5名の修了生を輩出することができ、プログラムに参加された学生から前向きな評価をいただきました。

2022年度においては、関係者と慎重に協議・検討を重ねたうえで、3年ぶりに、現地渡航を伴う留学として実施しています。

今後、渡航を伴う留学や、コロナ禍を契機として実施したオンライン留学など、これまで得られた知見を、学生の海外留学・交流促進事業全体の更なる充実・発展につなげていきます。



オリエンテーションの様子



留学イメージ（渡航留学）

ポストコロナを見据えた留学生誘致と交流事業のさらなる促進（留学生誘致・支援事業：留学生スタディ京都ネットワーク）

国際事業部を事務局とする「留学生スタディ京都ネットワーク」では、国内外への効率的・効果的なプロモーションによる「留学先としての京都」の認知度・ブランド力を高めることで、海外・国内からの京都留学（進学）の促進につなげるとともに、加盟校の留学生誘致活動等の支援や、京都で学ぶ留学生に対する、留学生・日本人学生・地域との交流促進、就業支援など受入環境を整備することで京都における留学生生活の満足度向上に向けた支援に取り組んでいます。

2020年度以降はコロナ禍のため、ツアー形式の留学生誘致活動、国内外での対面形式での留学フェアなど、一部の事業については実施を見送る一方、オンラインによる誘致活動や動画・写真コンテスト、留学生の交流コミュニティである「KyoTomorrow Academy」における、オンラインと対面を織り交ぜながらの日本語での交流や文化体験など、様々な工夫をしながら取組を実施してきました。

加えて、留学生と地域の交流・連携促進として、2021年度に実施した『「京丹波黒豆の学校」〔田舎に触れて考える～農村地域の人たちとの交流の集い～〕〕に引き続き、2022年度は京都府唯一の村である南山城村を舞台に「しいたけとお茶の里山の暮らし」と題し、こんにゃく作り体験やしいたけ菌打ち・採取作業を通じて、留学生同士や留学生と地域の方々の交流を行いました。

普段から、留学生同士の交流だけでなく、日本人や地域との交流を望む声も多くいただいております。コロナ禍にあっても当ネットワークに期待されている役割として、学校の枠を超えた留学生同士や留学生と地域との交流のさらなる促進を目指していきます。



こんにゃく作り体験の様子



地元の方から「おいしいお茶の入れ方」説明

留学生対象インターンシップ（留学生誘致・支援事業：留学生スタディ京都ネットワーク）

留学生スタディ京都ネットワークでは就業支援の一環として留学生に特化したインターンシップを実施しており、これまでは有給型のインターンシップのみ実施してきましたが、受入企業・団体の拡充を図るため2021年度からは無給型のインターンシップを併用して実施することとしました。

その結果、2021年度はコロナ禍前の規模に回復、2022年度においても受入企業・団体の業種の幅も広がり、留学生にとってはインターンシップの機会が増えただけでなく、選択肢も広がることとなりました。

留学生の就職活動状況に関する民間調査においても、インターンシップ参加経験が日本人学生の約半分にとどまり、就職活動開始の動き出しも遅い傾向があるとされており、留学生に特化したインターンシップの果たす役割は大きいと考えています。コロナ禍の先行きが不透明であることや、令和7年3月卒業・終了見込みの学生からは新たなインターンシップ制度が運用されるなど、目まぐるしく変化する状況の下、引き続き、少しでも多くの留学生にインターンシップの機会を提供していきたいと考えています。



インターンシップ報告会

第19回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム

2022年10月15日・16日、財団が事務局を務める全国大学コンソーシアム協議会が主催する全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムが東京たま未来メッセで開催されました。

全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムは、高等教育の発展に資するべく、各大学コンソーシアムの取組や研究成果等の情報交換を目的とされているものです。

第19回は「高等教育の充実と地域社会の発展を目指して～大学コンソーシアムが持つ無限の可能性を模索する～」をメインテーマに、大学コンソーシアム八王子と全国大学コンソーシアム協議会の共催により、3年ぶりに対面形式での開催となりました。

全国から283名の大学教職員や教育関係者等が参加し、基調講演やシンポジウム、分科会における事例報告があり、「大学コンソーシアム」の可能性について考える有意義な場となりました。



フォーラム会場



フォーラムの様子

インターンシップ実習生の受入れ

財団が実施しているインターンシップ事業（ビジネス・パブリックコース）のプログラムに参加した4名の学生を財団でも実習生として受け入れました。

実習期間は2週間。教育事業部、調査・広報事業部の2組に分かれ、実習を行いました。

教育事業部においては、単位互換制度の出願者数を増やすことを目標として、学生の単位互換制度の認知度を高め出願につなげる方策を検討してもらいました。調査・広報事業部においては、「大学のまち京都・学生のまち京都」公式アプリ「KYO-DENT」のダウンロード数増加策を検討し、京都市の担当者にもプレゼンテーションしてもらいました。

実習生を受け入れることで、実習プログラムをつくる難しさなど受け入れ側の立場を知ることができましたので、財団として今後のインターンシップ事業がより良くなるよう改善に努めてまいります。

Interview

京都の大学生が作り、つなげた20年

今年で第20回を迎える「京都学生祭典」。企画から広報、営業などすべてを学生の手で行う、学生プロデュースのお祭りです。今回は、3年ぶりの対面開催に向けて日々奮闘する学生実行委員3名にお話を伺いました。(取材日：2022年9月8日)



写真左から第20回京都学生祭典実行委員会
副実行委員長 笹尾 嵩典さん(京都産業大学3年生)
実行委員長 白山 龍太郎さん(立命館大学3年生)
副実行委員長 柏原 千夏さん(平安女学院大学3年生)

先輩たちへの恩返し

京都学生祭典実行委員会に入ろうと思ったきっかけを教えてください。

柏原： 私は京都に住んでいる叔母から「京都ではこんなお祭りがあるんだよ」と教えてもらい、京都学生祭典を知りました。実行委員会が運営している SNS を見て活動に興味を湧き、入りました。

笹尾： 私は1回生の時にサークルや学生団体の情報が載っている大学の掲示板で知りました。その後、柏原さんと同じように SNS を見て、「面白そう」と思ったので2年生になってから入りました。

白山： 私は石川県出身なのですが、京都の大学に進学した友達から「京都学生祭典、面白いから京都の大学に来たら一緒に実行委員やろう」と誘われて……。その友達は第19回京都学生祭典実行委員長を務めたのですが、まさか1年後に、僕が実行委員長を引き継ぐことになるとは思っていませんでした。



友達同士で実行委員長を引き継ぐなんて不思議な縁ですね。それだけ楽しかったということでしょうか。

白山： はい。楽しかったですね。ただ、昨年所属していた広報部では、自分の担当しか見えていなかったと心残りもあったんです。また、前の実行委員長から話を聞くなかで、「僕だったらこうしたい」とアイデアが浮かんできて……。次第に「実行委員長になりたいという」感情が芽生えていきました。実行委員長になった今年は、広い視野で取り組むよう心がけています。

副実行委員長は実行委員長からの指名と聞きましたが、声がかかった時は率直にどう思いましたか？

白山： それぞれ葛藤があったようなので、聞いてあげてください(笑)。

笹尾： 私は、正直「自分に務まるのかな」と迷いがあったんです。でも、他の執行部が決まり、まもなく新しい体制が動き始める……。これはもう、僕がやるしかない!と決断しました。

柏原： 私も想像していなかったのが驚きましたが、私が副実行委員長になることで、お世話になった先輩への恩返しができるのではないかと考えたんです。今は「対面で(本祭を)見たい」と言ってくれた先輩たちに喜んでもらいたいという一心で活動しています。

白山： 3人いる副実行委員長は、スケジュールやタスクの管理など、僕の苦手なところをフォローしてくれる頼もしい存在です。もちろん、性格や視点は異なるので、意見がぶつかることや喧嘩することもあります。逆にそれがいいと思っています。

ゼロから考え直したから言える「これでいいんだ」

コロナ禍での活動は初めて尽くしと聞きました。印象的なエピソードがあれば教えてください。

白山： 1年生、2年生とオンラインでの開催を経験した僕たちにとって、「3年ぶりの対面開催」は分からないことだらけでした。先輩たちが残している過去の資料そのままでは、今年ではできないことが多いんです。そのため、今年は交通規制に伴う道路使用許可のマニュアルなどをゼロから考え直しました。大変ではありましたが、「先輩たちはこうだった」という固定観念を捨て、自分たちが考えたからこそ「これでいいんだ」という思いを強く持って活動を続けてこられました。

笹尾： 私は本祭当日を含めた短期スタッフ募集の担当をしているのですが、コロナ禍前と比べると応募数が少なくて……。今、まさに難しさを実感しています。3年ぶりの対面開催なので、京都学生祭典のことを知らない人もいだろうし、無理ありません。

短期スタッフを経験した人が来年度実行委員会に入ってくれると良いですね。

笹尾： そうですね。250名くらいいたころの賑わいが戻れば良いなと思っています。近々、短期スタッフを集めてのミーティングを開催します。初対面の人同士が集まる場になるので、打ち解けられるようなプログラムを考えているところなんです。

実行委員会での活動を通じてご自身に変化はありましたか？

柏原： 私は人との関わり方が変わったと思います。今までは自分と気が合う人と仲良くして、価値観が違うと思ったら距離をとるタイプだったんです。でも副実行委員長になってからは、本当にいろんな性格の人と話をすることが増えて。「この子にはこう話したらいいかな」とか、一人ひとりの個性を認めた上で接し方を考えられるようになったおかげで友達の幅も広がったように思います。



白山： はっきりとした変化はまだありませんが、今年は「企画や広報に奔走している時間」が、去年よりも尊い時間と感じるようになりました。それは、僕が昔から「コスパが良いためにはどうするか」をいつも考えてきっちりやることと余力をもってやることを分けていたからかもしれません。今は雑用も含めてどんなことにも 100% で臨みたい、でも時間が足りない……。実行委員長として、その矛盾とも誠実に向き合いながら本祭まで走り切った後に、変わった自分に出会える気がします。

これから岡崎地域と共に

第20回ならではの企画ばかりかと思いますが、みなさんの推し企画はなんですか？

白山： 第20回の記念に Chicago Poodle（シカゴプードル）さんを

特別ゲストにお迎えしたスペシャルステージは必見です。Chicago Poodle さんは第1回京都学生祭典「全国学生音楽コンテスト」での優勝などを経てメジャーデビューされたバンドです。平安神宮前ステージでの演奏は見ごたえがあると思いますよ。

笹尾： 僕のオススメは「ファミリーこんだてコンテスト」です。食に関する企画は、2年間実施できていないので、各団体が提案する“わが家の味”を楽しんでいただきたいです。それから第3回から続いている「京炎 そでふれ！コンテスト」にも注目していただきたいです。11のホストチームが個性豊かな衣装や見ごたえある演舞を披露します。

柏原： 20年の記念として神宮道の北側にマンホールが設置されるのですが、本祭当日にお披露目ができるので、楽しみにしていただきたいです。



白山： 第20回のテーマが「恩、咲けべ！」なんですけど、今までお世話になった岡崎地域に恩返し気持ちと、これから京都学生祭典が25回、30回と続いてほしいという願いを込めてマンホールを設置します。

京都学生祭典の象徴とも言える場所に設置することで、これまで以上に地域への想いが強くなりそうですね。皆さんの力で、京都学生祭典が長く愛される京都のお祭りになることを期待しています！

本祭終了後の3人に直撃！



時間短縮されましたが、自分たちができることを精一杯出し切ることができた本祭だったと思います。悔いが残る結果となりましたが、人生で一生忘れることのない貴重な経験となりました。（柏原）



雨の中の開催となり、様々な変更も余儀なくされましたが、全体として思い出に残り、次に繋がる本祭になったと思います。（笹尾）



満足感も後悔も残る最高の本祭になったと思います。また確実に次に繋がる形で終われたことも大変良かったと思います。（白山）

Information

2023年度京カレッジ リカレント教育プログラム申込受付開始！

働きながら学ぶとする現役世代を中心とした多様な年齢層に対する学びの機会の提供と実現をめざし、以下のリカレント教育プログラム3講座を開講します。講座の詳細やお申し込み方法については、当財団京カレッジのホームページをご参照ください。

▼ 現代の教養講座「宇宙移住に向けた最先端研究と企業技術」



開講期間	前半 2023年6月1日(木)～7月27日(木) 18:30～20:00 <5日間全5コマ> 後半 2023年10月5日(木)～11月30日(木) 18:30～20:00 <5日間全5コマ>		
開講方法	オンライン (zoom)	定員	各100名(応募多数の場合は抽選)
受講料	前半 5,000円/後半 5,000円	募集締切	前半 5月2日(火)/後半 9月5日(火) 17:00まで

▼ 働く人のためのデータサイエンス講座-現場で使える分析法・処理法



開講期間	2023年6月24日・7月1日・7月15日(土) 10:30～16:15 <3日間全9コマ>		
開講方法	オンライン (zoom)	定員	50名(応募多数の場合は抽選)
受講料	20,000円	募集締切	5月24日(木) 17:00まで

▼ 現代の対人援助に必要なこと - 新しい領域と課題の生成をめぐる -



開講期間	2023年7月7日(金)～10月6日(金) 18:30～20:00		
開講方法	オンライン (zoom)	定員	100名(応募多数の場合は抽選)
受講料	10,000円	募集締切	6月7日(水) 17:00まで

2023年度京カレッジ リカレント教育プログラムに関する情報はこちらから

<https://www.consortium.or.jp/project/sg/recurrent>



京都留学生フォトコンテスト2022の受賞作品が決定しました

国際事業部が事務局を務める「留学生スタディ京都ネットワーク」では、京都地域で学ぶ留学生を誘致するため、京都留学の魅力をPRしています。今年度は、その中の取組として、京都で学ぶ留学生が、京都留学の魅力を伝えるフォトコンテストを行いました。京都留学の魅力いっぱいの京都留学生フォトコンテストの作品を、ぜひご覧ください。

最優秀賞



優秀賞 (3作品)



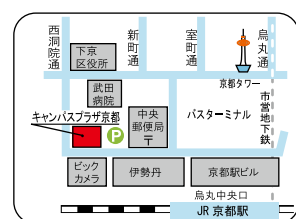
受賞作品
詳細はこちら



▼ 京都留学生フォトコンテスト2022 受賞作品

最優秀賞	「Go ahead with a text book of mine. Under the Kyoto's brightest sky」 Duangkamon Kamonsakpitak (京都民際日本語学校)		
優秀賞 (3作品)	・「避難所」 ZHEN GYUEHAO (京都精華大学) ・「初めての、初めての、初詣」 金 佳賢 (同志社大学) ・「京都に触る」 ZHU MENGSHAN (京都大学)	審査員特別賞 (3作品)	・「自分自動」 Keren Zohar (同志社大学) ・「The best of both world」 Tang Phattharaphuti (京都大学) ・「7」 Alexander Rütjes (京都大学)
留学生PRチーム賞 (3作品)	・「International Friendship Collaboration」 Thebuwanage Shashika Srimali (京都情報大学院大学) ・「Go ahead with a text book of mine. Under the Kyoto's brightest sky」 Duangkamon Kamonsakpitak (京都民際日本語学校)【重複】 ・「The best of both world」 Tang Phattharaphuti (京都大学)【重複】	一般投票賞 (3作品)	・「虹電車」 何 楽宇 (同志社大学) ・「初めての浴衣」 劉 芷綾 (龍谷大学) ・「雪国の貴船」 周李 宇源 (花園大学)

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る キャンパスプラザ京都内
TEL : 075-353-9100 (代表)
FAX : 075-353-9101
E-mail : pr-ml@consortium.or.jp
WEB サイト : <https://www.consortium.or.jp/>



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto